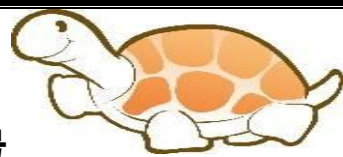




のこのこたより



令和7年10月第126号

社会福祉法人晃宝会

特別養護老人ホームあじさい園 宝

住所：奈良市南肘塚町99番1

電話：0742-24-0878

fax：0742-23-0373

東向き北商店街の豊住書店が閉店となり残念に思っておられる奈良の方はたくさんおられることでしょう。ところが、日曜日たまたまオープンされていて、貴重な蔵書を古本としてきれいに陳列されていました。私は昭和49年刊行の畠井操氏の本が目にとまり、記念の第1号として買いました。畠井氏は1947年シベリアの抑留生活から帰国され、その尊い体験を生かした評論家として幅広く活躍されました。畠井氏のステキな一節をお聞きください。

明るくというのは外部のいろいろな不利な条件の中にあつて、いつも希望を失わないという心情をいう。本田宗一郎氏の言ったように「おれは、私は、必ずよくなる人間だ」という建設的な明朗な柱を立てることができるのは、そういう気持ちがあるからだ。この大きな太い柱を自分の未来にドシンと立てなければいけない。先行きのことは確かにどうなるかわからない。わからないから人は迷う。迷えば判断が狂うだろう。わからない前途に希望を持つためには「必ずよくなる」という自己免許を出す必要がある。人は何かの保証がないと心配なものだが、さてとなると、絶対的な保証は見つからない。

一番確実なのは自分が自分を保証することだ。「オレは必ずよくなる人間だ」とまず自己保証することだ。その太い柱を立てるからこそ、中途の困難にへこたれずにすむ。そのうえで「ではよくなるためにはどうすればいいか」と、前向きな手段方法を考える。やがて手段が見つかるという順だ。秀吉も藤吉郎時代「なんの保証もない草履取りだが、今日よりは明日、明日よりは明後日、オレはだんだんよくなる人間だ」と決めていたそうです。



本末先生の健康体操開催！暑い中先生と一緒に腕を伸ばしたり、身体をねじったりと健康体操を頑張っていました。お腹も減っていつもより美味しい昼食時間となる事でしょうね。

奈良ばやしや、九州炭鉱節等の盆踊りの曲に合わせて地域の皆様と一緒に踊ったり、歌ったり夏祭りを楽しめました。あちらこちらから楽しい声が聞こえてまいりました。

敬老の日の祝膳です。天ぷらや焼き魚、炊き合わせ等彩もきれいで美味しいわ、「巨峰はとても甘いわ」ご利用者様同士笑顔でお食事をしました。



8月のお誕生日は、手作りのサラダ巻でした。暑い夏にさっぱりとした口当たりのお寿司は大人気で、皆様感動されました。

10月の行事予定

17日：誕生日会	15:00
20日：あじさいサロン	14:00
28日：防災訓練	11:10
GH防災訓練	14:00
30日：選べる日の献立 昼食会	

いつもご協力、ご支援ありがとうございます。事前予約での面会を行っています。ご家族様のご来園をお待ち申し上げます。



第 102 回 歯磨きの歴史

「楊枝屋」が社交場に 粋な江戸っ子が愛した歯の掃除法

砂糖の国内生産でむし歯増大？

骨考古学者の片山一道博士によると、日本人あごの骨は弥生時代以降、小さく弱くなり続けているそうです。歯も次第に小さくなりましたが、あごの小型化に追いつけず、中世の日本人の歯並びの悪さは、世界でもトップクラスになってしまいました。

江戸時代の人骨には、むし歯、歯周病、歯髄炎などを患ったあとが多く見られます。中でも、むし歯の増加は、江戸時代に一段とスピードアップ。原因は、おそらく「砂糖」でしょう。江戸中期には、砂糖の国内生産が盛んになったおかげで、高嶺の花だった甘い菓子を庶民も楽しめるようになり、そして、むし歯も増えることになりました。

房楊枝 各部位の役割



- ①: ブラシ毛に相当
- ②: ツースピック (爪楊枝)
- ③: 舌ブラシに相当

の下
けて



房楊枝。片方が尖り、もう一方が筆のように房状になっている

楊枝を使う美人画も登場

江戸時代には人々の歯に対する意識も少し変化していきます。たとえば、この一句。

「親のすね かじる息子の 歯の白さ」

これは、働かずに、身ざれいにして遊んでいる若い男を皮肉った川柳ですが、この頃には、白い歯かどうか、粋か野暮かを見分ける印にもなっていたのです。江戸吉原の遊郭では、朝帰りする客に楊枝と歯みがき袋、うがい茶碗を出していました。布団の上で洗顔と歯みがきをスマートに行うことが、粋な遊び人とされていたのだとか。また、江戸時代の浮世絵師は、房楊枝を使う美人画をよく描きました。人々は、房楊枝を使う姿に、粋や色気を感じていたのでしょう。房楊枝が庶民に広まり、全国に楊枝屋ができるようになっていきます。

江戸では、浅草観音に詣でた三代将軍家光が楊枝屋に足を運んだという話が広まり、浅草寺境内に楊枝屋が軒を連ねました。江戸末期には約 250 軒に増えるほどの繁盛ぶり。

京都では粟田口のさるやが有名で、江戸の日本橋にも 1740 年にさるやができました。ちなみに、日本橋さるやは現在も楊枝専門店として営業を続けています。

こうした店は、それぞれに看板娘を置いて売り上げを競いました。浅草の「柳屋お藤」は有名な看板娘。「用事（楊枝）がないのに 用事をつくり 今日朝から二度三度」とうたわれるほどの人気で、多くの江戸っ子が、お藤目当てに店先に集まりました。

江戸の楊枝屋は、華やかな社交場でもありました。

